

2020 年度

NGO スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2021 年 3 月 4 日	
氏名	渡部 陽子	
所属団体(正式名称)	特定非営利活動法人 アジアキリスト教教育基金	
派遣タイプ	研修受講型	
研修国	日本	
受入機関名	1. 認定 NPO 法人ムラのミライ 2.-① (特活) 開発教育協会 (DEAR) 2.-② (特活) 沖縄 NGO センター (ONC)	
研修期間	1. メタファシリテーション講座ステップ1 : 2020 年 12 月 12 日、 メタファシリテーション講座ステップ2 : 2021 年 1 月 27 日、2 月 3 日 2. d-lab2020 (第 38 回開発教育全国研究集会) : 2021 年 2 月 20 日-23 日	
研修テーマ	ファシリテーション技術を向上させ、開発教育を通じ NGO 活動を活性化 する	

1. 導入（研修前の問題意識、所属団体や NGO が持つ課題および課題解決方策の分析など）

日本の高等学校では新学習指導要領で「総合的な探究の時間」（いわゆる「探究」授業）が取り入れられ、総合学習に代わってより自分の生活や生き方と結び付けたアクティブ・ラーニングへの取り組みが促されている。その際に SDGs を探究のテーマや切り口とすることが各学校や教員で模索されている。高等学校に限らず小学校や中学校にもグローバル教育やアクティブ・ラーニングが導入される中、現場の教育からは従来とは違う学習方法を模索しつつも具体的な教材作成に関して苦労しているとの声がある。

所属団体である ACEF は創立以来 30 年間で 44 回のバングラデシュ・スタディーツアーを実施し、延べ 787 名（その 49% が大学生、15% が高校生）が参加し、そこから国際協力専門家、教育者、医師・看護師、報道関係等のキャリアを目指す若者を輩出してきた。（定款においても「国際協力への理解・参加促進事業」と位置づけ、「バングラデシュの教育支援」と並ぶ二つの柱の一つである）

しかし、2015 年の日本人ボランティア殺害、2016 年のダッカテロ事件等バングラデシュの治安状況の悪化により、ACEF の原動力の一つであったスタディーツアーが中止を余儀なくされ、それによって若者の活動への参加が減っている。2019 年夏には 4 年ぶりのスタディーツアー実施となったものの、2020 年夏は COVID-19 により中止となっている。このような不確実な時代に「国際協力への理解・参加促進事業」

（日本の子ども・若者の教育）をスタディーツアーだけに依存することはリスクが高い。

加えて ACEF の組織課題の構造分析から、様々なリソースを活用できていないことが浮き彫りになった。上述のスタディーツアー参加者の人的リソース、団体会員や繋がりのある学校とのネットワーク、バングラデシュでの 30 年間の教育支援活動の経験や知見、SDGs を考える際の「先進国」と「途上国」のパートナーシップの理念と経験といったものが、特に日本の学校教育の現場へフィードバックされていないことが指摘された。

これまでも 2005 年に ACEF 国際理解教育ガイドブック「あなたとわたしはちがう？あなたとわたしはおなじ？～隣人と共に生きるために～」を会員である教員を中心に作成し、高校の新指導要領の中で取り組むこととなった「総合的な探究の時間」の授業で活用したり、SDGs や ESD に関して ACEF とつながりのある学校の教員から、「バングラデシュ」「教育」「気候変動」をテーマにした探究型の学習指導や SDGs の学習について ACEF から提供できるものはないかとの求めがあったため、2019 年 11 月には宇都宮大学教授／開発教育協会理事の湯本浩之氏をファシリテーターに「みんなで作ろう SDGs の教材」というワークショップを開催するなど、基礎的な SDGs の学びと教材作成のアイデアを議論してきた。加えて、新型コロナウイルスの影響により、学校の授業のあり方も大きく変更せざるを得ず、よりオンラインを活用した教材やプログラムを開発する必要もでてきている。今後、関心があるスタッフ・教員が有識者のアドバイスのもと時間をかけて教材開発を行い、体系的なプログラムや具体的な教材作成ができるようにしていきたいと考えている。そのためには、スタッフが開発教育について理解を深めることが課題であると考えている。

そこで、認定 NPO 法人開発教育協会（DEAR）が主催した、全 6 回の「開発教育ファシリテーション講座」に参加し、他の開発教育・国際協力・ESD の実践者、学生、研究者との交流やディスカッションを通して、開発教育ファシリテーションについて知見を深めた。具体的な研修内容は、以下の通りである。

第 1 回 9 月 27 日（日）9:30～12:30

「私とファシリテーション」

自分の経験や実践とファシリテーションとの関わりを振り返る。この講座で何を学びたいのか、講座を受けてどうなりたいのか、を参加者で考える。

第 2 回 10 月 4 日（日）9:30～12:30

「開発問題とファシリテーションー開発教育の教材体験から考える」

開発教育の代表的な教材ワークショップを体験し、そのうえで開発問題の構造を体感的に理解することや、問題に対して感じたことや意見を出し合うことについてファシリテーションの観点から改めて考えてみる。

第 3 回 10 月 11 日（日）9:30～12:30

「感情やニーズ、開発教育観を聴く ―共感・問いかけ・パラフレーズ」

感情を振り返ることから自分や他者のニーズに気づく。相手の話をじっくり聴くこと、問いかけで思いを引き出す練習を通して、ファシリテーションに必要な聴く力を考える。

第4回 10月25日(日) 9:30～12:30

「自分とみんなの参加 ―開発問題では避けられない〈合意形成や意思決定〉プロセスから」

学習活動への参加を支えることは、ファシリテーションの重要な役割である。開発問題を話し合ううえで避けられない、合意形成や意思決定プロセスを通じて、自分の参加、みんなの参加を「分析」してみる。

第5回 11月1日(日) 9:30～12:30

「思いや考えを引き出す「問い」 ―テーマへ、私自身へ」

新聞記事の内容を使った問いづくりを行い、思いや考えを引き出す「問い」に着目する。「問い」を通して自らの持つ価値観を問い直す機会をつくる。

第6回 11月8日(日) 13:00～17:00

「実践とファシリテーションをふりかえる ―聴く力、問う力をつかって／修了式」

自分の実践やファシリテーションを、第1回～5回の講座で得た聴く力や問う力を活かしてふりかえる。自分だけの「オリジナルふりかえりカード」の作成にもチャレンジする。

「開発教育ファシリテーション講座」に参加し、「共通普遍的なファシリテーションやファシリテーター像があるのではなく、それぞれの個性や重視したいことを自分自身で描き出すことがファシリテーションに求められることだ、...ファシリテーションに関して、共通する観点は多々あり、技法もある。しかし、それが「できる」ことを目指した方法論(ノウハウ)に頼ったファシリテーションを見出していくのではなく、自分自身の教育観や人間関係感、コミュニケーションの取り方や個性を引き受けたうえで、どういうファシリテーションをしていこうか、と見出すプロセスに「ファシリテーションを身につける」ということそのものがある¹⁾ということを知り、所属団体の「国際協力への理解・参加促進事業」を活性化するためには、開発教育のファシリテーションを身につけることが不可欠であると考えた。本プログラムでは、メタファシリテーション講座でファシリテーション手法の一つを学び、多種多様な開発教育に関するワークショップや分科会、実践事例・研究報告会のあるd-lab2020(第38回開発教育全国研究集会)に参加し、開発教育の様々なテーマについて体験や議論を重ね、開発教育のファシリテーションを身につけることを目指した。

2. 本文(研修テーマについて明らかになったこと、課題解決を前提とした研修実施内容の詳細報告)

2-1. メタファシリテーション

メタファシリテーション講座の概要は、以下の通りである。

〈メタファシリテーション講座ステップ1〉「事実質問」と「思い込みを引き出す質問」の違いを理解し、「思い込みを引き出す質問」を「事実質問」へと変換する方法を学ぶ。思い込みに囚われないコミュニケーションができるようになることを目指す。

〈メタファシリテーション講座ステップ2〉当事者自身が課題分析できるように、事実質問をつなぎながら対話を組み立てていく方法を学ぶ。相手の課題分析、行動変化を促すやり取りを組み立てられるようになることを目指す。

メタファシリテーション手法とは、「ファシリテートする側が当事者に対して事実のみを質問していくことによって、当事者が思い込みに囚われることなく自分の状態を正確に捉え、そのことによって自分の経験知から課題の解決につながる示唆を主体的に得る過程を創り出す手法である。また、この手法はファシリテートする側が事実のみを訊くことによって自分が現在何を訊いているのか正確に認知すること、す

¹⁾ 近藤牧子 開発教育のファシリテーション再考―「開発教育ファシリテーション研究会」の経緯(2020年 開発教育 67号 開発教育協会)

なわちファシリテートする側のメタ認知 (meta cognition) を促し、ファシリテーションの過程そのものの客観性とファシリテートする側と当事者とのコミュニケーションの効果を最大限に担保する。」と定義されている。²

メタファシリテーション講座ステップ1においては、語学学習の勉強がはかどっていない友人との2つのパターンの会話を比較した。Aパターンは自分のアドバイス・提案をした会話、Bパターンは友人の過去の経験(事実)を聞き出し、友人自らが解決策に気づいていく会話(メタファシリテーション手法を取り入れた会話)であった。次に、朝食に関する3つの質問の違い、質問①朝ごはんは何が好きですか?(感情)、質問②朝ごはんにはいつも何を食べますか?(考え)、質問③今朝は何を食べましたか?(事実)について説明があった。事実質問と事実を聞けない質問(思い込み質問)については、下記の通りである。

A. 事実質問

◆過去に実際に起こったこと→過去形

◆いつ(時間)・どこ(場所)・だれ(当事者)・なに(事項)を特定する疑問視で聞ける

◆目の前で起こっていること→現在進行形

例: それは何ですか? /どこで売っているかご存知ですか? /それ誰からもらったの? / (親が時間割表を見ながら子へ) 2限目体育の授業、何やったの? / (医師から患者に) 前回お渡しした吐き気止めのお薬は残っていますか? / 今日、お持ちの文房具の中で、同じお店で買ったものはありますか? / 今、ライターをお持ちですか? / (友人同士で) この前(前回)このお店に来たのはいつだった? / 一番最初に身につけた腕時計を覚えていますか? / (親が筆箱を忘れていった子に) 誰にペンかりたの? / (友達のつけているネックレスを見て) そのネックレス、素敵ですね。あなたご自身で選んだのですか? / (親から子へ) 遠足に何を持っていくか知ってる? / 前回のサークルのミーティングの議題は何だったか、覚えていますか? / (親から子へ) 今日、クラスで休んでいたのは何人いた? / その小説家の本を誰かに紹介したことはありますか?

B. 事実を聞けない質問(思い込み質問)

◆なぜ(why)

◆どう(How)

◆一般的な言い方 ※ いつも、よく、みんな、一般的に、毎日、だいたい、●●人は、男の人は...

例: 友だちとちゃんとうまくやってる? / どうしてもっと早く起きなかったの? / (友達の財布を見て) いつも長財布を選ぶの? / (親から子へ) 授業についていけない? / どうして洗濯物入れてくれなかったの? / 新しいクラスどう? / お好きな食べ物は何ですか? / お休みの日には何をしていますか? / (友人のペンケースとポーチが赤色なのを見て) 赤が好きなの? / 将来は何になりたい? / (外部者からメンバーへ) サークルのメンバーで仕事を分担していますか? / この村では皆さん何を食べていますか? / いつもあなたをいじめるのは誰? / どうして人と話すのが苦手だと思うのですか? / 農作業で困ったことはありませんか?

その後、事実質問と事実を聞けない質問(思い込み質問)を区別する練習や、事実質問を作ってみる練習、〈コーヒーを淹れる〉の細分化を例に、シークエンス(手順)を分解して事実質問を作る練習、3人

² 和田信明・中田豊一によるメタファシリテーション手法の定義 <https://muranomirai.org/meta-facilitation/>

一組で事実質問の練習を行った。また、自己肯定感が下がっているときは、課題の解決につながらないこと、対話では、受容、共感、相手の言ったことを繰り返すことも忘れてはいけないということも学んだ。

メタファシリテーション講座ステップ2においては、ステップ1のポイント、〔1. 事実のみ質問する、2. アドバイス・提案はせず相手が気がつくまで待つ、3. 自己肯定感に配慮する（相手が答えやすい質問をする）〕について振り返った。人は、〔①聞いたことは、忘れる。②見たことは、覚えている。③やったことは、身に付く・習得する。④発見したことは、使う。〕ので、成功体験を引き出し、信じて・待つことを確認した。「なぜ？」を使わずに理由を浮かび上がらせる聞き方としては、〔①「それが一番最近起きたのはいつですか？」、②「それが最初に起こったのはいつですか？（あるいは）最初に気が付いたのはいつですか。覚えていますか。」〕と言った2つの「いつ」質問が最も効果的である。事実質問で時系列で聞いていくと、変遷・ターニングポイントが浮かび上がる。また、安易な課題分析をさせないためには、状況を事実質問で知ること、相手に課題が起こった要因を思い出させること、当事者自ら課題を分析することが重要である。その後、参加者同士で、改めたい習慣/治したいクセについて事実質問で練習をし、課題であった〔1. 「なぜ？」「どう？」「いつも（一般的）」〕などの思い込み質問を我慢して試みた対話、〔2. 「なぜ？」「どう？」「いつも（一般的）」〕などの思い込み質問を使ってしまったときの対話（自分以外の人が使っている事例でもよい）、〔3. 対話していた相手が、自分から次々と話しをはじめた事例、4. 対話している相手と共通の認識を得られた事例〕について各参加者が発表し、講師や参加者と意見を交わした。

2-2. d-lab2020（第38回開発教育全国研究集会）

A. 写真で学ぼう地球の食卓（ワークショップ）（特活）開発教育協会（DEAR）

まずは、写真をつかった基本的なワークショップが実施された。全体でアフリカのマリの写真から読みとれるものを、チャットに書き出した。次に、グループに分かれ、教材として提示された4家族（インド・中国の北京郊外・エクアドル・エジプト）の写真のどれか1つから読みとれるものを書き出し発表した後、日本と米国の家族の写真2枚が追加された。先の4家族と比較すると、加工食品の多さやパッケージされた食品の多さに驚きの声があがった。その後、6家族の写真を「3日間ホームステイしてみたい順」、そして「ゴミがたくさん出そうな順」に並び替えをした。日米の食卓から出るゴミのほとんどは、プラスチック製品や紙類、そして、食べ残し（フードロス）などの加工食品が多いということは、加工や流通の過程でも、多くの食品が廃棄され、たくさんのエネルギーが使われていることも読みとれた。その後、どんな順の並び方をしたいか、アイデアを出し合った。生産から食卓まで関わる人の数、フードロス、フードマイレージ、自分たちの買い物の距離、調理を何人でやっているか、アレルギーが出なさそうな順、決まりに縛られている順（一人っ子政策など）、作るところから私たちのところに届くまでに使った水の量（WATERフットプリント）、糖尿病の人でも安心して食べられそう、長生きできそうな順、健康的なもの順、新鮮な食材を使っている順、調理にかかる時間順、みんなで食べる順、一人で食べる順、持続可能な順、エネルギーを使って量の順、輸入品ランキング、長生きできる順、そのままで食べるもの順、幸福度順、辛そうな順などのアイデアが出た。健康そうな順のように断定的ではなく、「～しそうな順」とする方が意見が出やすいとの提案があった。本（ワークショップで使用されている）教材は、世界24カ国30家族を訪問し、それぞれの家族と1週間分の食料をならべて撮影した写真集『地球の食卓—世界24カ国の家族のごはん』（ピーター・メンツェル+フェイス・ダルージオ、TOTO出版）をもとに作成されているが、ワークショップの最後には、「世界中の食を取材して学んだことは、ほどほどが大事だということ。先進国の人々は概して食べ過ぎで、運動不足で、健康を害している。伝統的な食事をしているように見える途上国の人々の生活にも加工食品が入りこみ、そして、医療が不足しているために、健康を害している。写真はぱっと見て、自分の食生活と比較することができる。人生に変化を起こすツールになりうる」というピーターさんが来日された際の話と、「以前、『続・地球家族』の取材ために、多くの女性に“幸せ”についてインタビューをしました。その時、途上国に暮らす女性の多くが“幸せについて考えたこともない”と答えました。日々、清潔な水を得ること、食糧を確保すること、安全に暮らすこと…。そう

いったことが大事なのです。“持続可能性”などというコンセプトは、先進国の問題なのだと気付きました。環境や食糧を奪っているのは誰なのか。先進国の方が多くの責任を負っています。広告や周りの人に流されず、生活をしていくことが必要だと思います³というフェイスさんの話の紹介があった。

B. プラスチックごみ問題を考える（ワークショップ）（特活）開発教育協会（DEAR）

まずは、「周りにあるプラスチックを集めよう！」というアイスブレイクからスタートした。思った以上にプラスチックに囲まれている生活に参加者の複雑な感情がうかがえた。オンラインワークショップでは最初の空気づくりも重要であり、このような優しい導入のアクティビティは「私も参加できる」「面白い」という参加者の自信と好奇心を高める効果がある。次に、プラスチックに関するクイズを全体で行い、その後「プラスチック・リサイクル・クイズ」のワークシートを使いながら、クイズ形式でプラスチックごみやリサイクルについて考えた。「イラストを見て話し合おう」の作業では、下記イラストを見て、「どうしてこうなった？」、「このままだとどうなる？」、「ここに描かれていないものは？」をヒントに、疑問点、気づいたことなど、個人作業で、できるだけたくさん書き出し、その後、グループで話し合った。



ハイムーン工房のホームページより⁴

「アクションについて考えよう」では、「元栓を締めるためには？」、「そもそも誰が元栓を開いている？」、「について考え、その後、「自分が今すぐできることは？」、「すぐではなくても、皆と一緒にできそうなこと、やりたいことは？」について考え、高校生や大学生、自治体や企業の実際の取り組みについて紹介があった。

C. 今日はフェアトレードの日！？（ワークショップ）認定 NPO 法人 WE21 ジャパン

まず、フェアトレードと市販品のチョコレートを比較し、違いを考え、チョコレートの生産過程について学んだ。次に、フェアトレードチョコレートの生産地の写真を見ながら、気づいたところを自由に意見交換するフォトランゲージを行い、フェアトレードの一般的基準について学んだ。それから、高校生のフェアトレードに関する実話を元にした紙芝居を通して、「選択できる消費者」として私たち一人ひとりにできることを考えた。

D. 写真と映像からよみとくルワンダ ―視点を広げる問いづくり（自主ラウンドテーブル）ふくいグローバルねっとわーく/山本 康夫

最初に、ルワンダのイメージについてグループワークが行われた。その後、ルワンダで録音した音だけを聞いて、「どんな場所か？」、「一日のいつの時間帯か？」、「どんなものがあるか？」、「どんな人

³ <http://dearstaff.blogspot.com/2016/09/blog-post.html>

⁴ ゴミック名作集 3-6 元栓を閉める - ハイムーン工房 (highmoonkobo.net) <https://highmoonkobo.net/?p=230>

がいるか?」、「何をしているか?」、チャットに書き込み、グループでも話し合った。次に、その音を映像と一緒に見て、「想像していたところと違ったところはあったか?」、「一番心が動いたところはどうの場面か?」、「どんな疑問が浮かんだか?」を話し合った。更に、別のルワンダの映像を見て、今度は、問いに答えない、批判や否定をしないことに留意して、グループで、できるだけたくさん問いを出しあった。全体に戻って、下の表1の事実認識（感情・気持ち）、構造・関係理解、自分の思考・行動といった3つの問いの分類について説明があり、再度、グループに分かれて、先ほど出し合った問いを分類する作業を行った。

表1：問いを分類してみよう

知る（感じる）	考える	行動する
事実認識 （感情・気持ち）	構造・関係理解	自分の思考・行動
「見えているもの」 ・存在 （ある・ない） ・結果 ・感情や気持ち	「見えないもの」 ・背景や文脈 （因果関係・課題解決） ・ストーリーやプロセス、変化 ・空間、時間、対象のリフレーミング	・自分とのつながり ・自分の思考・価値観 ・自分の生活や行動（の見直し）
どんなものがあるか。 どんな人がいるか。 どう感じたか。	どこからその品物はやってくるのか 1年前も同じ状況だったのか。 どうしてそう感じたのか?	私がそこで生活したら、何にときめくか。 この物語から学べることは何か。 自分が大切にしていることは何か。

E. SDGsに教育でどう取り組むのか? 気候変動を切り口に考える（分科会）

趣旨として、気候危機の問題を教育でどの側面から取り上げたら良いのか? 「こまめな節電」? や「グリーンカーテン」? それが「無駄」なわけではないけれど、個人の「善行」→社会の構造的な問題、教育で扱う際に何を目的化していくのかを考えていきたいと思いますという説明があった。グループに分かれて、「気候変動の問題に対して、やったことのあるもの、やってみたいことはありますか?」というワークシートをもとに、それぞれの意見を出して話し合った。全体に戻って、気候変動についてのクイズをグループで作業し、全体に解説があった。DEARの「気候変動」教材を使用し、気候変動の影響を受けている人が、どんな暮らしをしているのか、どういう困難に直面しているのか、キリバスのケンタロ・オノさん、ネパールのスミタさん、北極圏のホッキョクグマのエピソード読んで感想を出し合った。次に「気候変動への市民社会の取り組み」について、国際環境 NGO FoE Japan の高橋氏が登壇し、続いて「心がけ」に終わらせないSDGs教育～市民性を育むために～」について、神奈川県立高校非常勤講師の羽角章先生より発表があった。学校文化に潜む「隠れたカリキュラム」についての話もあり、SDGs教育を「心がけ」に終わらせず、市民性を育てるにはどうしたらよいか、気候危機をテーマにした教育に取り組む際に、何を目的にしたいか、どんな教育だったら良いと思うかについて、グループで話し合った。

3. 考察・提言

3-1 結論

昨今の不確実な時代において、所属団体のミッションの一つである「国際協力への理解・参加促進事業」（日本の子ども・若者の教育）をバングラデシュへのスタディツアーだけに依存している状況はリスクが高く、新しい事業を開発していくためには、開発教育について知見を深めることが必須であった。本プログラム以前に参加した「開発教育ファシリテーション講座」での経験をもとに、本プログラムでは、

「ファシリテーション技術を向上させ、開発教育を通じ NGO 活動を活性化する」を研修テーマとし、メタファシリテーション講座と、d-lab2020（第 38 回開発教育全国研究集会）に参加した。

メタファシリテーション講座では、1. 事実のみ質問する、2. アドバイス・提案はせず相手が気がつくまで待つ、3. 自己肯定感に配慮する（相手が答えやすい質問をする）という、3 つのルールを心がけ、講座内での練習はもちろん、日常での職場や友人、家族との会話でも、過去の会話を思い出し書き出す作業も含め練習を重ねた。メタファシリテーション手法は、1 対 1 の会話を基本としており、多数への問いかけが中心となる開発教育ワークショップなどにおいては、全てを取り入れることができるわけではない。しかし、ルール 3. の「自己肯定感に配慮する（相手が答えやすい質問をする）」は、開発教育のファシリテーションでも心掛けたいルールであり、ルール 1. の「事実のみ質問する」は、ワークショップなどで問いかけを選ぶ際の基準として活用できる。ルール 2. の「アドバイス・提案はせず相手が気がつくまで待つ」は、理想ではあるが時間の制約や相手の知識や経験によっては、アドバイス・提案が必要な時もあると思うが、アドバイス・提案を押し付けるようなことがないように留意することは大切である。また、メタファシリテーション手法は、国際協力の現場のみならず、学校、医療現場などを含む様々な職場や友人、家族との会話でも有効であり、今後は、インターンやボランティアを含めた職場の会話でも取り入れていきたい。

d-lab2020（第 38 回開発教育全国研究集会）においては、特に自身のテーマであるファシリテーションに焦点をあてて参加したが、多様なテーマ、多様な国・地域に住む、多様な経験を持つ人たちと意見交換をし、改めて、開発教育のファシリテーションを身につけるには、前述した「方法論（ノウハウ）」に頼ったファシリテーションを見出ししていくのではなく、自分自身の教育観や人間関係感、コミュニケーションの取り方や個性を引き受けたうえで、どういうファシリテーションをしていこうか、と見出すプロセスである」ことを実感した。更に自分自身の教育観や人間関係感、コミュニケーションの取り方や個性について再考し、引き続き日々、自分自身が成長していくことが重要であると確信した。今回の d-lab2020（第 38 回開発教育全国研究集会）は、沖縄を通して「ぬちどう宝（命こそ宝）」を考え、実践していくことがテーマであり、上記研修内容では記載していないが、沖縄の土地の歴史、言語、開発における様々な課題について学び考える時間ともなった。オンラインのため、グループ分けで決まった参加者との限られた時間の意見交換が中心となり、自由に色々な人の意見を聞いたり、納得がいくまで話し合ったり、連絡先を交換したりすることには制限があったが、前回の「開発教育ファシリテーション講座」の参加者とも再会でき、今後の活動につながる人や団体との交流の場にもなったのは、大きな収穫であった。

3-2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法（可能な限り具体的に記載下さい）

コロナウィルスの影響により、昨年は所属団体もスタディツアーを実施することができず、事務局員の出張も昨年 3 月以降見送られている。そのような中、オンラインで学生ボランティアを受け入れ、クラウドファンドのキャンペーンを行ったり、SNS で広報したり、PR 動画を作成したり、バングラデシュのパートナー団体のスタッフと定期的にオンラインで情報交換や今後について話し合いをしている。長年団体と関わっている関係者の中には、この状況の中、バングラデシュのパートナー団体のスタッフとオンラインで話をしたり、SNS など繋がったりすることを通じ、相手をより身近に感じられることもあるという意見もある。スタディツアーは実施できていないが、上記のような新しい活動で「国際協力への理解・参加促進事業」が活性化されており、活動に積極的に参加している学生インターンやボランティアとの会話にメタファシリテーション手法を取り入れていきたい。

また、所属団体 30 年にわたるバングラデシュ初等教育支援の成果であるノンフォーマル小学校卒業生と、日本の若者の育成を目指したスタディツアー 44 回の参加者延べ 788 名の現在と今後のパートナーシップについて論じた「SDGs 時代の国際協力」を岩波ジュニア新書から 2021 年 2 月出版した。これを契機として関係する中学・高校・大学において、所属団体の活動と SDGs の理念、目標 4「教育」を日本とバングラデシュを事例に講演する予定である。本プログラムでの研修成果を活かし、これらの開発教育活動

をより効果的に魅力ある活動にすることにより、日本の若者が現代の地球規模の課題やアジアの人々の置かれた状況に気付き、将来のより良い持続可能な社会の実現について自分事として考え行動する機会となり、また所属団体の活動も活性化したい。

上記岩波ジュニア新書「SDGs時代の国際協力」執筆のため実施されたスタディツアー参加者による座談会においても、参加者はアフリカ大陸、中東、日本の地方など、様々な場所からオンラインでつながり、世代と空間を超えた対話ができた。最近では、バーチャル・リアリティ（VR）を用いた体験型学習なども増えてきており、こうした技術を国際協力の場での交流、研究、視察、ワークショップなどに用いることも可能である。今後もしばらく、バングラデシュ現地へ行くスタディツアーの実施は難しいと予想されるため、バーチャルスタディツアーの実施も計画している。d-lab2020（第38回開発教育全国研究集会）での、沖縄オンラインツアーや沖縄の現地実況を交えた沖縄の歴史・文化の紹介、前述のD. 写真と映像からよみとくルワンダのワークショップなど、今回の研修成果を活かしたいと考えている。

3-3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言

d-lab2020（第38回開発教育全国研究集会）で前述した、E. SDGsに教育でどう取り組むのか？気候変動を切り口に考える（分科会）において、発表された神奈川県立高校非常勤講師の羽角章先生が提示した下表「国や社会に対する意識」（9カ国調査）は、とても印象に残った。あらゆる機関が協力してSDGs教育を「心がけ」に終わらせず、市民性を育てるまでに結び付けられるような開発教育の機会や場を日本の子ども・若者に提供する必要があると考える。

日本財団「18歳意識調査」第20回 テーマ：「国や社会に対する意識」（9カ国調査）

各国1,000人に聞く（2019）⁵

	自分を大人だと思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を変えられると思う	自分の国に解決したい社会課題がある	社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

Q. あなた自身、いつまで経っても答えがつかない（各設問 4択）（回答者割合）

4. 団体としての今後の取り組み方針

職員の研修に対し助成を得られて、このような学びができたことをまず感謝する。教育・人材育成分野での活動をしている組織ではあるが、小規模で資金も限られるためにバングラデシュでの教育支援事業に資金を投じることを優先し自組織の人材への投資は後回しになってきた。上記にも述べられている通り、バングラデシュでの教育支援にならび、スタディツアーを通しての日本の若者が国際協力やアジアの課題に目を向けるための国際理解・参加促進事業がもう一つの活動の柱であり、今後は学校での授業などに積極的に取り組んでいきたいと考えている。授業としてのコンテンツもさることながら、ファシリテーショ

⁵ <https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html>

ンできる人材を自組織に育てたいと考えているところ、今回のファシリテーションの研修は時機にかなったものであったと言える。

すでに当団体関係の中高教員等学校関係者から、バングラデシュでの経験を元に SDGs のテーマで探究の授業を行って欲しいとの要望があり、具体的に2回の授業を行った。いわゆる「開発教育・国際理解教育」の知識を得る形の講義と異なり、いかに問いを引き出し、自らの学びを深めることを促すかというファシリテーションが重要であることを実感した。これが団体の活動としてサービス提供できるためには、複数のファシリテーターを職員、役員、ボランティアの中に育てていく必要がある。今後も、研修の機会に職員等を派遣すると共に、実践の中でスキルアップできるように来年度は学校へのサービス提供機会を積極的に呼びかけていく予定である。

なお、『SDGs時代の国際協力』を岩波ジュニア新書として出版したことを受け、これを題材とした国際理解教育の教材・授業コンテンツも開発したく、教材開発での実績のある国内の団体に職員を派遣しての実務研修についても、引き続きNGOスタディ・プログラムでの支援を期待したい。

5. その他

5-1 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

コロナウィルスの影響もあり、国内でも対面での研修を実施することは難しく、予定していた研修も前半はキャンセルとなるものも多く、最初に募集のあった昨年3月時点では予定されていなかったオンライン研修が、年の途中9月頃より急に実施される状況であった。後期募集は11月から2月に実施される研修が対象となり、期間が短く、前述した昨年9月開始の「開発教育ファシリテーション講座」は応募する機会がなく、今年4月以降に実施予定の「メタファシリテーション講座ステップ3」も本プログラムでは受講することができなかった。募集回数を増加したり、年度をまたぐ研修も受講可能にするなど、柔軟性のあるプログラムにして頂けると更に良い研修になると思われる。

以上